

Heinrich von Kleist の「Der Findling」について

西 尾 右

Über Heinrich von Kleists „Der Findling”

TSUYOSHI NISHIO

1

Heinrich von Kleist の小説は「物語集」の表題の下に 1810 年に第 1 巻が、1811 年に第 2 巻が出版された。此の作品集中には彼の創作した小説全 8 篇が総て収録されているが、「Der Findling」, 「Der Zweikampf」をのぞく他の 6 篇はそれ以前にすでに、断片的部分的又は完成作として当時の新聞や雑誌に発表されていた。此の小論の対象である「Der Findling」は第 2 巻に収められているが、創作時期を決定づける資料に欠けている。

通常彼の初期作品の一つとみなされている此の短篇小説が、物語集出版の際に作者自身によって何等かの修正の手が加えられたことは十分に推測されうる。¹⁾ いずれにせよ此の小説は Kleist の他の小説に比して、内容的にも構成的にも著るしく異った面を示している。ここでは作中の女主人公である Elvire を中心に置いて此の特異な点を考察してみたい。

Kleist の女主人公達は 10 代後半の未婚の処女が圧倒的に多い。既婚女性を対象としたものは戯曲では「Amphitryon」の Alkmene, 「Die Hermannsschlacht」の Thusnelda, 小説では「Die Marquise von O ……」の O 侯爵夫人, 「Der Zweikampf」の Littegarda 夫人, それに此の「Der Findling」の Elvire である。Alkmene と Thusnelda では夫と恋人という両者に対する愛の純粋性が問題となる。一方、子持ちの未亡人である O 侯爵夫人と子なき未亡人 Littegarda はいずれも夫の死後は殆んど世間に顔を出すことのない隠遁的な生活を送っている。しかし事件の渦中に巻きこまれると彼女達は新しい局面の中で彼女達自身の自我の世界を構築して行く。此の時、かつては彼女達に幸福の日々をあたえた亡夫の影響力は完全に消え失せている。彼女達は現実に生じた具体的な状況下に自己自身、自我の存在の確実性を求めて懸命な努力を続けてゆく。彼女達の生きる基盤は過去ではなく、現在である。Elvire は初婚であり、O 侯爵夫人と対照的に一児を有する年上の男性の後妻となる。彼女は幼時に体験した事件を離れることが出来ず、此の過去の事件を必死に守る生活が続けている。彼女は云はば現在を遮断した過去に生きようとする。既婚女性を対象とした Kleist の諸作品の基本構成を以上のように概括すると、Elvire の置かれた状況の独自性が認められうるであろう。

「Der Findling」の主要人物は三人、老齡の豊裕な商人 Piachi, その若き後妻 Elvire, 彼等の養子 Nicolo である。

2

Kleist の小説全般を通じて冒頭に事件の生じる時代, 場所, 主要人物名が紹介される。此の年代記的な即物的描写は同時に簡潔な形容詞又は付加語によって, 事件発生までの人物の特徴的性格, 職業, 現に置かれている境遇が記述される。例えば「Michael Kohlhaas」や「Die Marquise von O ……」などに見られるように, 最初のさりげない人物紹介文が後の事件展開の大きな伏線となって重要な意味を帯びてくるようになる。「Der Findling」は次の様な文章で始まる。

Antonio Piachi, ein wohlhabender Güterhändler in Rom, war genötigt, in seinen Handelsgeschäften zuweilen große Reisen zu machen. Er pflegte dann gewöhnlich Elvire, seine junge Frau, unter dem Schutz ihrer Verwandten, daselbst zurückzulassen.²⁾

Elvire に関しては彼女が＜若い＞(jung) 妻であること, 夫の長期の商用旅行の際には彼女の親戚の庇護をうけることが報告される。何故彼女が親戚の＞庇護をうける＜のか (unter dem Schutz) 理由はまだ示されていない。しかし此の言葉の中に彼女が一般的な主婦とは違った立場にあることが予測される。少くとも彼女が夫の留守の間, 積極的に家事全般をとりしきるのではないことがうかがはれるであろう。原因はテキストに依ればほぼ3頁後, Elvire の前史となる幼児体験, Piachi との結婚生活の報告によって明らかとなる。その間に Piachi と Nicolo の出会い, Nicolo の成長過程とすでに彼の内面に発芽した悪の具現化―物欲, 権欲, 性欲―, 彼の結婚と養父母が全財産譲渡後の隠居生活にはいることが記述される。崩壊をはらみながら辛じて平衡を保っている此の部分は一種の緊張をたたえた序幕となっている。

Elvire hatte einen stillen Zug von Traurigkeit im Gemüt, der ihr aus einem rührenden Vorfall, aus der Geschichte ihrer Kindheit, zurückgeblieben war.³⁾

Elvire は裕福な商人の娘であったが, 13歳の時に生家は火事に襲はれ彼女自身も危うく一命を失くす危機に瀕する。その時, Colino と云う青年貴族が自己の生命を省りみることなく彼女を救い出す。しかし彼は頭部に重傷をうけ廃人と化し3年間の病床の後に若い生を終えたのである。

Elvire は地上にある一切を焼尽する焰の強大な力を見た。それは彼女の意志とは全く無関

係に、不意に思いもかけず姿を現し、彼女を抗し難い力で死へと駆りたてていった。彼女は外部から突如として彼女に襲いかかり、仮借なく彼女を翻弄する偶然の非情の力を体験した。そしてまた他者を救出するための犠牲的行為が此の下で悲惨な結果をもたらすことを知った。たしかに此の行為者は「英雄」(Held)である。⁴⁾ 人々は Colino の行為を称賛した。犠牲的行為の中には無私の人間のもつ高貴さがある。しかし同時に人間存在の尊厳を此の行為によって実証しようとする時、自己の生命が死と密接する危機に晒される。生の意義を死によって保証すること、死への一種の志向性があるとはじめて生の価値がその極点へ達すること、此の生と死の繊なす微妙な綾を Elvire は体験したのである。Colino の自由意志から生じた他者救済の行為は、一切を他者に依存しなければ生きてゆけない廃人化に終る。死の瞬間に生の充実があたえられるのではなく、死は3年間の長きに亘って徐々に彼の肉体を侵蝕してゆく。出来る限りの最善の治療も、彼の両親や Elvire の精根尽きはたす看護も虚しく、此の脳外傷の患者は回復しない。これはまさしく「理解しえない天の摂理による」のである、(durch eine unbegreifliche Schickung des Himmels)。⁵⁾ 原因と結果の著しい矛盾から生じる混沌と無秩序の此の世界を、かすかに照らす一筋の微光のように次の文章が続く。

....: er erstand nur selten an der Hand Elvirens, die seine Mutter zu seiner Pflege herbeigerufen hatte, und nach einem dreijährigen höchst schmerzvollen Krankenlager, während dessen das Mädchen nicht von seiner Seite wich, reichte er ihr noch einmal freundlich die Hand und verschied.⁶⁾

Elvire と Colino の間に内的な交流が完全に絶たれていたわけではない。彼女の献身的看護が彼の中に或る痕跡を残している。死の直前に彼女に対して彼は「親しげに」(freundlich)手を差しのばす。此の美しい、哀切な臨床の場は薄幸な青年への同情を読者に強く感じさせる。しかし此の文章の直後に Piachi と彼女との結婚が報告される。読者は Colino の死から受けた感銘を抱いたまま Elvire の結婚に直面する。後に原文を引用するが、此の報告の部分は僅か3行ほどで関係文、副文から成り立っている。主語、述語、目的語と文章形態の殆んど原型とも云える簡単な文章によって表現される内容は、Piachi は Colino 家と取引関係があり看護に来ていた Elvire と知り合ったこと、2年後に結婚したことが述べられているにすぎない。

W. Kayser は Kleist の小説に現はれる語り手(Erzähler)について次のように評釈している。『語り手自身が彼の物語る事件に—これは現実の出来事なのだが—完全に捕はれてしまい、作中の人物達に決して優っている訳ではない。語り手は事件の全貌を知らず、従って彼の予測は部分的であり彼の評価は彼の心にある共鳴、つまり作中の諸人物と同じく彼の全く個人的な陳述である。評価は殆んど常にその場その場の状況に向けられているのである。我々は語

り手から全体の意味解釈を期待してはならない。しかし現実に生じた事件の伝達者として彼に頼らざるをえない。語り手はこの責務を果たすために明らかに即物性、冷淡さを獲ようと努力している。』⁷⁾

Kleist のイロニーシュな面を研究する場合、作家 Kleist と語り手との関係が重要な問題点となるであろう。W. Wittkowski は「Das Erdbeben in Chili」に関する論文の中で次のように論述する。『語り手は事件の全知者ではなく、彼の観点は作者の信号を受け渡しはするが再び作者の見解を隠してしまう。語り手とは作家、語られた事件、読者の間の媒体であり、彼自身がイロニーの対象なのである。此のイロニーシュな仮面の下に作者 Kleist が姿を隠しているのは明らかであり、また、此の仮面の下で曖昧ながらも彼自身の態度を知らそうとしているのだ。』⁸⁾

M. Moering も亦、同じような見地から、Kleist は語り手を欺き、現実に行った、或いは起りうるであろう事件について、逆を告げる事態を語り手に主張させる場合がある。語り手は遍在者でなく、事実自体によって解説させるのだと指摘している。⁹⁾

Piachi, der mit dem Hause dieses Herrn in Handelsverbindungen stand, und Elviren eben dort, da sie ihn pflegte, kennen gelernt und zwei Jahre darauf geheiratet hatte, hütete, sich sehr, seinen Namen vor ihr zu nennen, oder sie sonst an ihn zu erinnern, weil er wußte, daß es ihr schönes und empfindliches Gemüt auf das heftigste bewegte....¹⁰⁾

上記の文章は先に触れた Elvire と Piachi の結婚報告を含んだ両者の夫婦関係を述べている。

Elvire は Piachi を恋愛の対象にはしていない。Piachi も Elvire に対して激しい恋愛感情を抱いているのではない。だが彼等は結婚した。激情が恋愛の総てを示すものではないにしても、Kleist の作品の特質の一つに愛の追求の激しさが挙げられる。此の作品には Piachi と Elvire の間にたとえそれが一方的であれ相手を求めてやまぬ情念がない。

Elvire の心を専有しているのは、今は亡き Colino である。Piachi はそれを知っている。知っていて結婚した。彼等二人の結婚の決意がどのような背景をもっていたかは、上記の文章中には示されていない。只、Piachi の Elvire に対する保護者めいた態度、父性愛的な彼女への配慮が描かれているにすぎない。

Kleist の小説、「Die Marquise von O……」, 「Das Erdbeben in Chili」, 「Der Zweikampf」, 「Die Verlobung in St. Domingo」では主人公達のまわりに血縁者が居り、前者と後者の葛藤、相克が自我実現の大きな試練として立ちはだかる。最も身近な者、最も理解の可能性をもつ者が最強の妨害者となる。Elvire の場合には両親、兄弟姉妹は完全に姿を消している。大火は彼女から肉親者と全資産を奪い去ったに違いない。彼女は孤児となって

いたと推察されうる。当時の彼女の生き甲斐は救済者 Colino の再起にあったと思われる。その為に全力を傾注した3年間の看病生活、そして Colino の死。彼女は極度の緊張の日々の後で虚脱状態に陥る。此の状態から抜け出した時、深い疲労感が彼女を浸す。彼女は安息を求めていたと推考できるだろう。

Piachi は不動産の売買を職業とする商人である。彼の活動する世界は物質が主体であり利害関係が渦巻く場である。彼自身も亦、その中で富を蓄積し成功者となっている。彼は Elvire の献身的な看護の姿を見ている。彼女の無償の行為は彼に絶対的な誠意が現存しうる可能性を教えた。彼が此の事実に感動したことは疑えない。しかし完全に彼女の庇護者の立場をとろうとするならば、結婚する必要はない、他に何等かの方法がありうるだろう。彼は妻をなくし、一児をかかえて多忙な日々を送っていた。恐らく彼は安定した家庭を望んでいたであろう。此の現実的側面も彼の結婚の一因となりうる。

以上のように彼等の結婚の動機を推定するのが許されるならば、夫であると同時に保護者としての立場を離れることのない Piachi にとって、此の夫婦生活は決して苦悩をもたらすものではなく、満足とは云えぬにしても不快の対象ではない。しかし彼の寛容さに感謝しながらも Colino への思慕をすて切ることの出来ない Elvire にとって、此の生活は彼女の心に暗い陰を落している。

3

Jupiter. Geliebte ! Wie du mich entzückst ! ...

.....
Du wißt, daß ein Gesetz der Ehe ist,
Und eine Pflicht, und daß, wer Liebe nicht erwirbt,
Noch Liebe vor dem Richter fordern kann.

.....
So öffnet mir dein Innres denn, und sprich,
Ob den Gemahl du heut, dem du verlobt bist,
Ob den Geliebten du empfangen hast ? 11)

Kleist の戯曲「Amphitryon」の此の一節は夫 Amphitryon に変身して Alkmene との一夜をすごした後で、彼女の愛を改めて確認しようとする Jupiter の問である。彼女は Jupiter の変身に気付かない。彼女の愛したのは恋人であると同時に夫でもある Amphitryon であると答える。だが、やがて彼女はいずれが真の夫であるかを決定しうる客観的判断の基盤を喪失し、彼女が信じていた絶対的な永遠の愛の現実性が揺ぎはじめる。彼女は自己の内部分裂を経験することになる。

Elvire の結婚生活は、一見こうした激しい破綻もなく平穩の裡に過ぎて行くように見える。それは夫 Piachi の彼女に対する態度にもよる。彼は彼自身が彼女の恋愛の対象でないことを知っている。彼女が、こと Colino に関すると激しい興奮状態に陥ることを現にみている。そうした時には彼女は涙をながし慰めの言葉も耳に入らず、いかなる場所にしようと席を立ち、ひとり静かに泣きあかすのである。その原因を知る者は Piachi 一人である。彼女は Colino に関する事件を一言も口に出すことはなかったからである。¹²⁾ もし此の青年貴族が生きているとすれば、年齢が一因となっているとはいえ、Piachi の寛大さ、一種の愛憐ともいえる態度が可能かどうかは疑問であろう。Elvire にとっても、それが意識的でなくとも、Colino が死者である故に、現実の不貞ではなく死者への追慕であると自己弁明が許される対象となる。Piachi は彼女に Colino のことを思い出させないように出来る限りの努力をしている。強引に彼女の内面に踏みこみ、彼自身を彼女の心の中に刻みこもうとするのを避けている。そうすることによって彼と彼女の間の絆が切れる予感があったのかもしれない。彼の態度は消極的である。これに対して Elvire は Colino を忘れようと努力しない。むしろ積極的に此の思い出に生きようとする。彼女は密室をつくり、そこに Colino の肖像画をかけ、彼女以外の何者も立ち入ることを禁じている。Colino に関しては、彼女はたとえそれが夫であろうと容喙を許さない。死者が生存者を規定しているのである。

Kleist は彼等の結婚に内在している危機を一事実の報告によって暗示している。彼女は結婚直後に激しい熱病に罹っている。¹³⁾ 彼女の内面を考察する場合、これは無視できない重要な事実である。Kleist の作中人物達が屢々失神状態に陥ることはよく知られている。失神は強度の肉体的衝撃によっても生じうるが、F. Koch は Kleist の場合には、此の現象は意識世界が現実との激突によって崩壊する際の外的表現であると解釈している。¹⁴⁾ Elvire は 2 回発熱し決定的瞬間には失神する。いずれも Colino が何等かの形で関係している事件に遭遇した時であり、此の肉体上の変調が内面と連動していることは疑えない。夫としての Piachi に実際に相対した時、Colino 以外の男性が彼女の生活圏に入ってくる現実直面せざるをえない。夫と恋人とは彼女の中では同一ではない。高熱は失神の前段階であり、内的世界の全面崩壊を意味するものではないが、内面の分裂、葛藤の危機を暗示している。Elvire にとって過去への執着は単なる想像世界をたのしむだけのものではない、彼女の存在の為の絶対的要件となっている。

Jupiter. Versprich mir denn, daß dieses heitre Fest,
 Das wir jetzt frohem Wiedersehn gefeiert,
 Dir nicht aus dem Gedächtnis weichen soll;
 Daß du den Götterttag, den wir durchlebt,
 Geliebteste, mit deiner weitem Ehe

Gemeinen Tag'lauf nicht verwechseln willst.

.....15)

Jupiter は Alkmene に対して彼と共にすごした一夜を決して忘れることなく、日常生活のとるにたりない時の経過と混合しないように要請している。愛の至福の一時は、記憶、回想、日常性との訣別によって永遠化される。

「Amphitryon」の中の Jupiter の要請を、Elvire はいわば自発的に実現したと云えよう。彼女は火事を通して偶然のもつ強大な破壊力と、犠牲的行為によってそれに抵抗する人間の高貴さを現に見た。偶然の支配する混乱の中で人間の存在意義を実証しようとする個人の懸命な努力を見た。そこでは自他の区別はもはやなく、自他が一体と化した固い相関の絆が彼女に生の莊嚴さを保証した。此の至高の時が再び現世に現われることを彼女は信じない、何故ならばその実現者はすでに死んでいるからである。過去を再現し、回想によって再生させ、彼女の心の中に確固不動なものとして定着させること、それが彼女の生きる支柱となっている。その為には「Amphitryon」の Jupiter が告げるように、心をこめて彼の姿のみを想い、あの時の出来事の一つ一つをあます所なく思い起さねばならないのである。16) 想起のよすがとして Jupiter が飾り帯に彼の頭文字を残すように、彼女も亦一室に Colino の肖像画を掲げている。Nicolo がその部屋に忍び入った時、彼はその部屋の異妙な雰囲気にと愕然となり恐怖に襲われる。

... Aber wie erstaunte er (Nicolo), als er alles leer fand, und in allen vier Winkeln, die er durchspähte, nichts, das einem Menschen auch nur ähnlich war, entdeckte: außer dem Bild eines jungen Ritters in Lebensgröße, das in einer Nische der Wand, hinter einem rotseidenen Vorhang, von einem besondern Lichte bestrahlt, aufgestellt war.17)

人気のない空虚な部屋に等身大の肖像画だけがある。彼女は此の肖像画の前に伏して独り過去に沈潜して行く。青年の英雄的行為、その悲劇的な結末、疲労の極点にありながら生きる充実感に溢れた看護の日々、そして親しげに差し出された彼の手。何一つ忘れてはならない。細心の注意を払い、情熱をこめ、全力を注ぎ過去へ没入して行く。

現実生活のあらゆる出来事は此处では完全に排除されねばならない、それによって追想は穢されてはならない。繰り返えす毎に純化され、益々その結晶度をたかめ、時間のもつ破壊力と忘却作用に抗しうる硬度をえなければならないのである。こうした精神力の集中が限界に達した時、彼女の中では時間の流れは止まり、過去は永遠となり死者が甦る。死者との愛の対話が始まるのである。Nicolo は Elvire が恍惚の表情を浮べているのを見た。そして愛の言葉を

ささやくのを聞いた。それは只一言だったがはっきりと Colino と聞きとれたのである。18)

Colino の肖像画は壁面にあるのではない。壁龕の中に赤いカーテンの背後で >一種異様な光をうけてかけられている< (von einem besondern Licht). 此の言葉から明るさ、快適さを受けとるのはむずかしい。具体的な色彩がのべられていないにも拘らず、陰鬱で無気味な印象をあたえる。太陽の光線は恐らく此の室内を照らすことがなかったように思われる。むしろ陽光を人工的に遮断しているようである。冷たく空虚で生の活気をしのばせるものは何もない。それは未来への展望を断ち、現実生活の場から離れ、自己自身の内面世界にのみ生きる Elvire の人生のように荒寥としている。彼女にとって生きることはあの過去の一時を保持し続けることである。現実の様々な事象と対決することによって彼女自身の人生を積極的に築きあげて行く行動性に欠けている。むしろそうするのを避けている。彼女の此の態度の中に現実逃避の姿勢が認められるであろう。

現実とは因果律の下に整然と配列され、明確な輪郭線をもち、眺望可能の全体像として現われるものではない。多様で多面に展開し偶然に満ちていて無秩序、混沌とした様相を呈している。人間は此の現実世界の中で夫々の志向を抱きその実現に努力しながら生きてゆく。此の生の活力の源泉は自己自身の生に対する確実感であろう。「生きる価値があるのか？」この問は単なる自答のみでは充分ではない、他者の答えを待って始めて客観的な確実さを帯びてくる。自己と他者との関係が最も密接な相関状態にある場合、問は「自分は愛に値するか？愛されるに値いしうるか？」に変わる。Kleist は「Amphitryon」の中で Jupiter に語らせる。「愛がなければオリムプと云えど荒涼たるものだ」と。19) 愛は Kleist にとって生きる為の原動力であり、同時に生の存続の基本条件となっている。彼は愛の中心に信頼を置く。信頼は他者に対する尊敬より発し率直に自己をその他者に披瀝することにある。真の誠実、真の愛は言葉ではなく行為によって示されなければならないと述べている。20) Elvire は少女時代に偶然の狂暴性と人間の高貴さとを体験した。特に Colino の行為は彼女の人生に於て再び見ることの出来ない至高の行為であった。その体験の時は彼女の生涯の最も聖なる時であった。彼女はすでに幼時に於て彼女の人生の極点に達している、以後の人生はいわば余生と化したといえよう。彼女の未来は過去の光輝にくらべれば色あせてみえる。彼女があの過去の日々を死守しようとするのは当然かもしれない。それに彼女は救い出された者である、しかも彼女の生命は救出者の死を代償にしている。彼女の胸中には Colino に対する自責の感情があったと思われる。Elvire の、彼の病床から離れぬ看護ぶりがそれを推測させる。Colino の肖像画は偶像である。それはひそやかに人眼をさけ壁龕の中に掛けられ彼女だけがその前に跪く。一つの可能性として、彼女は尼僧院に入り、その一生を神に捧げることも出来た。彼女はそうしない、彼女の内心ですでに Colino は神格化している。>理解できない天の摂理< よりも Colino の行為は人間の神性を実証している。彼の神化が深まるにつれて彼女の自責の念は益々深まり、自責の念の強まるのに応じて神化が一層深まって行く、此の循環運動の中で彼女と死せる Colino の

間の関係はその密度を高めて行く。だがそれは彼女の生活圏、彼女の内面世界の狹隘化を伴ってくる。彼女の此の一点への凝集は他のものを排除して可能となる。彼女の場合には他のものを摂取吸収してより拡く進展するのではない。彼女には自己の発展を促進するものはない。彼女は死者を愛している。だが彼は生きた *Du* として現実には彼女の生を支え共に苦しみ共に悩み助けあう他者ではない。彼女は *Du* なき虚構の愛に生きる。*Nicolo* の追想にのみ捧げられた彼女の心は確かに >純粹< と云えよう (*Elvirens reiner Seele.*)²¹⁾ しかし彼女の純粹さは現実喪失を代償とした虚構の世界の中で育まれている。彼女は過去の一時点に全活力を傾注し、現在は過去の残滓にすぎなくなっている。彼女の此の過去への強い執着は逆に現実への不安を推測させる。彼女の多感で繊細な心情は積極的に自力で現実の中に彼女自身の人生を開拓してゆく苦痛に耐えることが出来ないのである。

>此の世にさしたる望みを持たない< 女性 (*..., die wenige Wünsche in der Welt hatte,*)²²⁾, >徳の鑑として名の通った夫人< (*als ein Muster der Tugend umwandelnden Frau.*)²³⁾ 世間に対する彼女の態度は世間一般の慣習、しきたりの枠をはずれることはない。むしろそれに従うことによって外界との摩擦を意識的にさけている。>優しい、興奮の色をごくまれにしか見せない顔> (*ihr mildes, von Affekten nur selten bewegtes Antlitz*)²⁴⁾ で人々に接している。此の感情を抑えた顔は内心を隠す仮面である。他人の眼には *Colino* の肖像の前で恍惚となる彼女の激情は隠されているのである。彼女は養子 *Nicolo* の悪行を知りながら、彼を叱り彼の行為を制することはない。彼は同じ家に暮しながら彼女の関心外にある。しかし *Nicolo* はそれが邪推であったにしろ、彼女の中にある情熱を本能的に嗅ぎ付けている。やがて現実が彼女を急襲する。彼女は *Nicolo* の欲望の対象となり遂には凌辱の寸前にまで追いつめられ、それが原因となって死の床につくことになる。夫 *Piachi* に対しても彼女は一線を画している。大詰近くで彼が *Nicolo* によって苦境に立たされ、その打開のため奔走している時、彼女は病んでいて彼を助ける力はない。小説「*Marquise von O ...*」の *O* 侯爵夫人は失神状態で冒され受胎した時、彼女自身の力によって窮地を脱した。中篇小説「*Michael Kohlhaas*」では、*Kohlhaas* の妻は命を賭けて夫の危難を除こうとする。彼女達のもつ行動力は *Elvire* にはない。彼女の態度が示す事実を見れば、時折彼女を修飾する抽象的な形容詞、*gut, trefflich*,²⁵⁾ *treu*²⁶⁾ は殆んどその意味内容の明確さを失ってくる。むしろ、さりげなく報告される、彼女の肉体的特質を示す具体的な言葉が彼女の本質を一層よく暗示している。*zart*,²⁷⁾ *kurzsichtig*²⁸⁾ の2語である。彼女の体は現実を克服するにはあまりにも >きゃしゃ< (*zart*) であり、彼女自身の人生を展望するにはあまりにも >近視的< (*kurzsichtig*) でありすぎたのである。

の三作品をほぼ同時期の作品とみなし此等の主題とその取り扱いの共通点や相違点を次のように論じている。「『Amphitryon』の主人公 Alkmene も Elvire と同様に近視(kurzsichtig)であり、それは全く逆の意味をもつものである。両者の相違は彼女達の内面にあり、前者では夫と恋人の分離は彼女自身から生じ、後者では外的なものが原因となる。Piachi は老人であり愛されていない、その誠実さと寛容さにも拘らずひたすら仕事に没頭する夫である。これに対して Colino は若く美しく彼女の記憶の中に消えることなく現存している。彼は彼女の偶像と化している。此れは一種の転位現象であり、原因は感情にとぼしい満たされざる結婚にあり、転位の結晶が救済者 Colino である。」更に T. Mann の此の作品に対する評釈を引用し「ローマン的な、道徳上は非難できぬこともない密かな恋愛崇拜―彼女の行為をローマン的不貞と表現している。J. Schmidt は、日常生活の卑俗さに失望し幻想世界に身をゆだねるローマン派への批判を此の作品の中に認めている。」²⁹⁾

Nicolo と Elvire には奇妙な類似点がある。彼は悪疫の町から脱け出して Piachi に拾われる。その為に Piachi は幼い我が子を病死させる。Nicolo は養子となり見事な商才を発揮して Piachi を満足させる。やがて全財産を譲渡され名実共に Piachi 家の主人となる。Nicolo は Elvire がそうであったように死の危機から救い出されている。Nicolo の勤勉さは Piachi への報恩を思わせるが欺態であり、むしろ彼の本性的な物欲がその主因である。Nicolo の特質は精神性の完全な放棄にある。彼には内面の分裂はなく生への疑念も不安もない。彼はあらゆる機会を利用して、何如にして欲望を充たすかを打算する。彼が失敗する時、一切の責任を他者に転嫁する。彼が自分の行動を反省するのは、その手段の拙さであって意図ではない。彼の内面が傷つくことはない。彼は現実世界にのみ生きている。Nicolo も Elvire も状況によって彼等の基本的態度を変えることはない。Piachi は Colino と共通するものをもつ。彼は Nicolo を救い、或る意味では孤児同然となった Elvire を引き取ったともいえる。彼はしかし Colino と異り Elvire の愛を獲得することはできなかった。それが彼の心に無影響であったとは思えない。Nicolo からも亦手酷い仕打ちをうける。全財産を譲った此の養子から妻はまさに凌辱されんとし、激昂した Piachi は Nicolo を我が家から追い出そうとしたが、逆に法を盾にとる Nicolo から追放されてしまう。彼の合法的手段によって財産譲渡を取り消そうとする努力は虚しく、すでに以前から関係をもっていた教会と結託した Nicolo の政治力の前に敗れる。Elvire の死が彼の苦痛を倍加する。激怒に馳られた彼は Nicolo を虐殺し、その罪によって絞首刑を宣告される。Piachi は神による魂の救済を拒否し、地獄で再会するであろう Nicolo に対して徹底的に復讐することを誓う。そして付き添う神父もなく只独り静かに絞殺されたのである。Colino は廃人化から死へ、Piachi は殺人から絞首刑へ、此の二人の救助者達は共に悲惨な死への道を進んで行く。Nicolo と Colino、偶然に Nicolo が発見したようにこの二つの名前はアルファベット単なる置きかえである。その基の f 文字は変わらない。同一衣装をたとえば外観から両者を区別するのは難しい。此の外的酷似性は偶然である。

だが Kleist は偶然のもつ意味を深めている。偶然とは様々な変容の可能性を秘めている。現実の中で確実な事実とみなしているもの、それは社会的な境遇や慣習や先入観、偏見、或るいは一つの思想に濾過された偶然の断片なのかもしれない。現実とは常に生成し変容するものではないか？ Kleist はこう問いかけているようである。彼が Kant 哲学から受けた人間の認識能力の限界を知った衝撃の跡を、ここに認めることが出来るだろう。もし Colino が生きていたら Nicolo と同じ世界に生きているかも知れない、老いた Piachi のように Elvire の追想の中で浄化されることはなかったかも知れないのである。主要人物に様々な共通性や類似点をあたえながら、彼等相互の関係を Kleist は故意に複雑化させる。Kleist は此の操作によって彼が生肯定の基盤とした Du, あの生きた愛の対象なき世界の錯綜を表現しようとした。Elvire に係る人物が総て死滅するのは、彼女の排他的、自己自身の内面にのみ耽溺する現実喪失の不毛性を思わせる。Kleist の他の作品には彼女のような女性が現われるものはない。

Findling の和訳は拾い子、棄て子、地質学的には漂石、俗に迷子石、棄子石とも云われている。此の石は遠方から氷河によって運ばれて来て地表に残された石だと云う³⁰⁾、Nicolo だけが Findling ではない。作中の他の人物、Elvire も Piachi も亦 寄方無き者、つまり Findling であろう。此の題名からも Kleist の意図一偶然を必然的なものとして受容する為の基本的要件とは何か一を推測することができるであろう。

注

Text : Heinrich von Kleist. Sämtliche Werke und Briefe. 2Bde. Herausg. von Helmut Sebner. Hanser 1965

- 1) Heinrich von Keist. Aufsätze und Essays. Herausg. von W. Müller-Seidel. Darmstadt 1973. W. Kayser : Kleist als Erzähler. S. 230.
- 2) Text Bd. 2 : Der Findling. S. 199.
- 3) Text Bd. 2. : a.a.O. S. 202.
- 4) Text Bd. 2. : Das Erdbeben in Chili. S. 158. Fernand は Colino と同じ犠牲的行為によって göttlicher Held と称賛された。
- 5) Text Bd. 2. : Der Findling S. 203.
- 6) ebd.
- 7) W. Kayser : a.a.O. S. 236ff.
- 8) W. Wittkowski : Skepsis, Noblesse, Ironie. Form des Als-ob in Kleists Erdbeben. S. 257. Euphorion 63. Bd. 3. Heft. Heidelberg 1967.
- 9) M. Moering : Witz und Ironie in der Prosa Heinrich von Kleists. S. 242. München 1972.
- 10) Text Bd. 2. : Der Findling S. 203.
- 11) Text Bd. 1. : Amphitryon V. 443-457.
- 12) Text Bd. 2. : Der Findling. S. 203.
- 13) ebd.
- 14) Koch のこの説は拙稿「Heinrich von Kleist の „Schroffenstein” について」で解説してある。産業大学教養部紀要第 4 巻第 2 号。昭和43年 3 月 1 日発行

- 15) Text Bd. 1. : Amphytryon V. 493-500.
- 16) Text Bd. 1. : a.a.O. V. 1473-1485.
- 17) Text Bd. 2. : Der Findling. S. 207.
- 18) Text Bd. 2. : a a.O. S. 209.
- 19) Text Bd. 1. : Amphytryon V. 1517.
- 20) Text Bd. 2. : Wilhelmine von Zenge あて書簡. 1800年初頭.
- 21) Text Bd. 2. : Der Findling. S. 212.
- 22) Text Bd. 2. : a.a.O. S. 202.
- 23) Text Bd. 2. : a.a.O. S. 209.
- 24) Text Bd. 2. : a.a.O. S. 206.
- 25) Text Bd. 2. : a.a.O. S. 201.
- 26) Text Bd. 2. : a.a.O. S. 202.
- 27) Text Bd. 2. : a.a.O. S. 212.
- 28) Text Bd. 2. : a.a.O. S. 210.
- 29) J. Schmidt : Heinrich von Kleist. S. 176ff. Tübingen 1974.
- 30) 漂石については様々な憶測がなされていたが, J. L. R. Agassiz (1807-73)によって科学的に解明された.

(昭和52年9月30日受理)